

グローバル人材育成プログラム

富 樫 晃 典
Kosuke TOGASHI
物質化学科 3年

1. はじめに

私は「異文化と触れ合いたい」「世界を見たい」「新たな出会いを求めて」など、子供のような純粋な気持ちでプログラムへの参加を決めました。昨今、SNS や通信網の発達が目まぐるしく、何千里も離れた異国の文化を知ることは片手間でできてしまいますが、それでも実際に自らの目や肌で見て触れることは電子の世界では得られない大切なものではないか、それこそ自分を刺激し天啓でも授けてくれるのではないかといった一縷の望みもありました。そんな思いで、本プログラムへの参加を決めた私は、自身の不十分な英語力、圧倒的なコミュニケーション力不足を理解しつつも、それが立ちふさがり壁ならば乗り越えてみようというチャレンジの思いも込めて、参加したいという気持ちを確固たるものとししました。

2. 実習先概要

実習させていただいた企業は HACKJPN というところで、設立日は2014年12月、CEOは戸村光氏です。主な事業としては日本人留学生の支援サービス（シリバレシップ）、情報発信サイトの運営（HACKLetter）などがあります。

3. 実習内容

実習内容は大きく分けて3つありましたのでそれぞれを以下に示します。

- ① やりたいことリストの作成
- ② アプリの調査
- ③ 英語記事の要約

3.1 やりたいことリストの作成

1, 5, 10年後およびインターン中にやりたいこと、得たいことを25個書き出し、本当の自分とは何かを客観的に判断するための実習でした。

3.2 アプリの調査

海外では流行っているけども日本ではまだ認知されていないスマートフォンアプリを探しだし、日本に向けてのプレゼン資料を作成する。ここではその後、プレゼンの動画を作成し Youtube に投稿しました。

3.3 英語記事の要約

日本人起業家にとって、ためになるような英語記事を要約して、読みやすく、わかりやすい説明文をつくる実習でした。この実習が私の実習の大部分であり、多くの時間を費やしました。

4. 実習から得たもの

私が行った実習は仕事を体験するというよりは作業を通じて物事を学ぶことが多かったように思います。しかし、各実習を行う中で仕事は何か、作業の意義は何かなど、様々なことを戸村さんと彼の仕事仲間である組田さんから教えていただきました。以下に各実習で学んだことを順に記します。

4.1 やりたいことリスト

5個や10個やりたいことはすぐにでてくるでしょうが20個を超えたあたりから自分の頭の中にはアイデア何も残っていないなと思い始めました。25個のアイデアを出すため残りの5個を絞り出すのに10分~15分の時間をかけました。そして自分と真摯に向き合って絞り出したその願望や理想が本当の自分なのだと思います。また、この実習では作業にかかった時間を測定し、いかに効率よくアイデアをだしていけるか、も重視していきました。一見すれば非生産的な作業ですが、自己探求や時間効率の改善など、社会に出ていくうえで必須なエッセンス

がこの実習には含まれていました。

4.2 アプリの調査

ここでは作業の効率について考えるとともに、何故そのアプリが日本で流行ると考える理由を深く考えました。今回の実習では私の専門とは関係のない内容を行っていたため実習の意味や目的を見出せずにいました。このような作業から何を学び、そして自分のためになるものにするにはどうしたらよいかを戸村さんや組田さんから教えていただきました。それは「作業の裏の意義を常に考える」ということです。常に自分は何をしてそれがどうなるのか、これが今世界にどんなアプローチへとつながるのか、そのアプリがどのように社会の輪に取り込まれていくのか、どうすれば面白い日本になっていくのかなど様々なことを考えていくことで、単純な作業から楽しい仕事へと意識が変わっていきました。

4.3 英語記事の要約

英語記事の要約を行ったとき英語力不足に加え、専門用語の知識が不足しているなど多くの困難が立ちました。しかし、戸村さんに任せられた以上実習をやり遂げようと全力で行いました。厚顔無恥にも多種多様の翻訳サイトを駆使し、専門用語はまずは日本語で意味を調べ、ありとあらゆる手段を用いました。それでも翻訳一日目は「仕事が遅い」「日本語が変」など言われましたが、最終日には「早いですね」「プロっぽい」とお褒めの言葉を頂き、小さな成長を感じました。

5. おわりに

私の実習は私の専門外のことでしたが、「仕事」をすることの意義を学ぶ上では日本では得られないものばかりだったと感じました。私と同一歳である戸村さんの積極性や行動力を目の当たりにし、初日

から「あせり」を覚え、恥ずかしく思いました。私が実習を行った現場は常に新しい発見をしようとする多くの人がアグレッシブに活動している業界であり、戸村さんや組田さんも常に「動いて」いました。また、私の持っているイメージでは日本の企業に入社すると、社員は「精密な歯車」としてのを果たすことが求められるものだったのですが、シリコンバレーでは「異なる意思を持った歯車」として人々が噛み合わさって新しいアプリや予想もしていないサービスが生まれているような気がしました。常に決まったルーチンをこなすような仕事ではなく、多種多様な文化が入り混じるアメリカという国だからこそ柔軟に、多方面に視線を向けて日々動いているように戸村さんや組田さんが見えました。そこから私が学んだことは「動く」ということです。考えがまとまったならば、それを実現するために思案しているよりも動くべきであるし、たとえ考えがまとまっていなくとも、まずは「行動」と、火中の栗を拾いに動くことも時には大切だと学びました。

今回、海外とは日本で生まれ育ってきた私にとって夢のある場所であると同時に、とても厳しい場所であると実感しました。日本ではあたりまえがアメリカではあたりまえでない、日本では正しいことがアメリカでは正しくない。文化においても仕事のスタイルにおいても日本とはどこかずれていて、日本の文化に慣れ親しんだ私にはとてもむず痒く、住み辛い、大変な場所であると思いました。しかし、日本が世界の中心ではない以上、世界基準として見習うべきは日本の文化ではなく海外の文化、多国籍な人が集う場所であるアメリカの文化であるかもしれません。少なくとも日本以外の文化、仕事のスタイルを学ぶことが、今回のインターンを通じてとても大切だと実感しました。